

F D ACULTY DEVELOPMENT

I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 19 号

January. 24, 2007

初任者懇談会

紙面構成の都合もあり大変遅れてしまいましたが、初任者懇談会について報告させていただきます。平成18年度の初任者懇談会が7月19日（水）の午後開かれました。貫井学長、堀学部長のあいさつに始まり、法人職員のサービスと倫理・給与の仕組み（山田人事課長）、外部資金・科研費（山名国際研究協力課長）、FDの現状と課題、授業評価（FD委員会）などについて説明があり、最後に意見交換を行いました。参加者には熱心に聞いて頂き有意義な懇談会になったと思います。

暑い中を参加していただいた初任者の皆様、お疲れ様でした。また、説明の任に当たられた皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。 (M)

初任者の皆様には懇談会の感想を書いていたいただきました。

家政教育講座 志村結美

7月に行われた初任者懇談会において、法人職員としてのサービスと倫理、給与の仕組み、科研費を中心とした外部資金の獲得、そしてFDに関する現状と課題等についてお話を伺った。独立法人化後の大学や我々、大学で働く者にとって、財政的にも社会的にも厳しい現状であることを実感した。また、授業評価をはじめ、FDに関しても説明をいただき、卒業時の学生の質の保証に向け、大学の担う責任の重要性を認識するとともに、自らの教育、授業の在り方を問い直す機会となった。このように有意義な懇親会が来年度以降も開かれることを切望したい。

ソフトサイエンス講座 川口高明

今回、初任者懇談会として山梨大学の現状を認識・理解する機会を与えていただきありがとうございました。委員の先生方及び担当の職員の方には会計から教育業務等にいたる細かな点までご説明いただき、私自身は大変有益かつ有意義な時間をもつことができたと同時に、教員としてFD関連も含めた様々な面での認識を深めることにもなりました。

私はこれまで別の国立大学法人に勤務しておりましたが、この度、山梨大学に移って改めて独法化による各大学の組織や方針などの多様化及び将来に向けた厳しさなどを感じている次第です。

山梨大学においても各種業務において電子化・ネットワーク処理が進んでおり、この利用方法を理解することが、私は着任後すぐに必要となっておりました。これに対しても、懇談会において質問や相談に対応していただき、多くの疑問を解消することができました。これからキャンパスネットワーク上の教務・研究に関するサービスを活用して、効率の良い教育・研究活動を実践するよう心がける所存です。また、外部資金獲得のために、充実したシステム及び事務体制を構築されていることを知り、教育・研究活動の一環として外部資金の重要性を改めて認識いたしました。そこでこれまで以上にこの面でもさらに努力したいと考えております。

-*

2006 年度第 2 回 FD ウィーク（授業公開）報告

2006 年度の FD ウィーク後半戦を体育教室のお二人の先生にお願いしました。紙幅の都合上、今回は 2006 年 11 月 27 日（月 4 時限）に行われた藤本先生の授業公開（専門科目「体育科内容論」）についてご報告いたします。小山勝弘先生（保健体育講座）の「健康トレーニング論」についての報告は次号でさせていただきます。（M）

第 2 回 FD ウィーク公開授業（その 1）：「体育科内容論」

〔授業者の思い〕

保健体育講座 藤本 俊

体育科内容論の授業は、藤本（器械運動・体ほぐし運動）と木村（表現運動）が担当している。7 時間の中で小学生に教えておかなければならない「器械運動」「体ほぐし運動」の具体的な内容と指導方法の指導は、時間が少なく、又、80 名という学生を対象とする授業において大変苦勞をしている。

器械運動の指導内容は、「マット・跳び箱・鉄棒・平均台運動」である。又、21 世紀のはじめに、新しい運動領域である「体ほぐし運動」が登場し、これが一体どのような運動なのか、どのような目的を持ち、なぜこのような運動が必要なのかについて指導をしなければならない。

今回の授業では、「鉄棒運動」の基本について授業を実施した。鉄棒運動というと「逆上がり」「前回り」「後ろ回り」等のイメージで「出来ない」「怖い」「つまらない」という授業を思い浮かべる学生が多く、何をどのように指導すればよいのか分からないというのが学生の本音である。このような学生のために、鉄棒運動の基本的内容である低鉄棒遊びの具体的な内容（参考書・指導書に紹介されていない内容）を資料として配布し、陥りやすい欠点とポイントを実際に模範演技を見せながら説明を行った。

又、鉄棒運動が嫌いな理由として、①技が出来ない。②怖い、落ちる。③手が痛い、膝が痛い等の原因が挙げられる。この嫌いな原因を解消できる方法として藤本が考案した手作りの補助器具を紹介した。手の痛さを解決するために、水道管を半分に切り、鉄棒にはめテーピングで貼る。水道管にバスタオルを巻き、腹部、膝等の痛さを解決する。落下防止については、柔道の帯で約 20 cm の円周の輪をつくり手首を固定する。落下と技の保証は、柔道の帯を利用し、腹部が鉄棒から離れないように固定し前方支持回転、後方支持回転が誰もが出来る方法である。

つまり、「支持感覚」自分の体を両手で支える運動。「逆さ感覚」自分の体を逆さになる運動。「回転感覚」自分の体を前方・後方に回転する運動。「懸垂感覚」順手・逆手・片逆手等でぶら下がる運動を、誰もが簡単に出来るポイントを分かりやすく説明指導した。高度な難しい技術を指導するのではなく、優しい運動を遊びながら鉄棒運動に慣れさせ、知らず知らずに基本を身につける方法である。この 3 つの運動感覚が身につけば、「逆上がり」等を指導しなくても自然に発展していく事を説明した。この授業は、毎時間私の授業を通して、指導者になった場合に指導書となるようにノートにまとめさせている。

この授業は、時間数が少ないことと受講生が多いため指導方法を中心に実施している。学生の

中には、教員採用試験にマット・鉄棒・跳び箱運動の実技試験があるので、スキルの習得を望んでいる学生がいる。

教員採用試験対策については、全国の器械運動の実技内容のデータを紹介し、希望する都道府県別に採用試験日の前6月に、オフィスアワーを利用して学生との時間を調整して、指導を毎年実施している。

〔授業参加者の感想〕

○はじめに鉄棒あそびの社会環境についての説明があり、配布したプリントに基づいて講義と実演を交えながらの授業でした。●鉄棒の嫌いな学生達にその理由を述べてもらい、その理由を取り除き楽しくかつ鉄棒の各種の技ができる方法を指導しました。先生自ら美しい模範演技を行い、鉄棒の技ができるためのポイントを分かり易く説明しました。次に安全ベルトなどの教材・教具を使用しての実演をしました。また、二人一組で行う助け合い演技の方法の実演もしました。これらのような方法を駆使して行えば、今まで鉄棒ができなかった者・嫌いだった者も、楽しみながらできるようになると思いました。●受講学生の人数が多く、僅かの学生が先生の指導で講義に基づいた演技を行っただけでした。少人数の授業であれば、より一層の高い効果が得られると思いました。●講義の合間にユーモア（駄洒落？）を交える等の方法により、多勢の学生の集中力を保持していたことが印象的でした。●本授業を見学して、講義の中に如何にして学生を引き込んでいくかという課題が与えられました。（技術教育講座 杉浦 修）

○実技系の講義の中で重要なことは、プラグマティックな面、つまりこの講義の実用価値をしっかりと学生に伝えることだと思いました。●また特に教職関連の授業の場合には、現場（昨日の場合、学生が実際に授業を受け持つときと採用試験を受けるとき）での臨場感が最も学生に訴えうるものだと思いました。●さらに実技系の場合、やはりデモンストレーションが必要であることを再認識致しました。言葉での説得には限界があり、見せる授業という面は今後様々なところで注目されると思います。●最後に受講人数の多さによりかなり苦勞されているのではないかと感じました。その意味で受講生の体験が組み込めなかったのは藤本先生も残念だったのではないのでしょうか。（生涯学習講座 加藤朋之）

FDリレーエッセイ第5回 アフリカの森の恵み：ピグミーの教え

生涯学習講座 川村協平

私たちはとても混乱した社会で生活しています。混乱した生き方は何が大切なのかを見えにくくします。大学教員の我々はもちろんですが、柔軟性を持っているはずの大学生さえも本当に大切なものを見失って暮らしているように思えて仕方ありません。多くの学生がパソコンや携帯電話があたかも最も頼れる大切なものであるかのように、それらに依存して暮らしています。便利な物が多すぎたり、情報が多すぎて人間どうしの心温まるふれあいを見失うことは人間にとって大きな損失です。

私は科学研究費(国際学術研究)を利用して6度、アフリカカメルーンの熱帯雨林に住む狩猟採集民(バカピグミー)の村で調査を行いました。私のテーマは「元気に暮らす力は自然の中での暮らしから生まれる」というもので、指標として血圧や血液循環動態(加速度脈波)を測定しました。

森と共存しておだやかに暮らす人々は血圧は低く血液循環もかなり良好です。また彼らの生き方は、便利で快適な物に依存して暮らす日本の私たちに大切なメッセージを発信していると感じました。

ピグミーは生活のすべてを森に依存しており、衣食住を森の恵みに頼っている人々です。彼らにとって森は生活そのものであり、森に感謝している数多くの儀式をみることができます。

村の中で一緒に生活させてもらいながら感じたことは、「なぜこのように穏やかにいられるのだろうか」「なぜこんなに優しいのだろうか」「なぜ子どもが親や年寄りを大切にするのだろうか」「なぜ人を攻撃しないのだろうか」ということでした。そして近くにいととても安心できました。

彼らの社会は競争社会ではなく共存社会・分配社会です。狩猟採集した食べ物を均等に分配して暮らしています。それは、たくさん手に入れた者が勝ちという我々の社会のあり方とは決定的に異なる点です。

その安心空間の中で子どもたちは小さい頃から狩猟採集に出かけ森と深く関わって一人前に育っていきます。自然と共存するピグミーは、物質的には貧しく、一見不便であり、土で汚れて見えるけれども、我々よりもはるかに心豊かな暮らしを送っていると感じました。

森を生活の糧にしているピグミーが元気に暮らしているとすれば、彼らから私たちは何を学び、それを日本の子どもたち（学生）にどのように伝えたいのかを考えてみる必要があります。

ピグミーの暮らしから、日本の子どもたちが元気に成長していくために必要なヒントがたくさん見つかります。

- 空腹で活動すること、
- 不便でシンプルな暮らし、
- 夜明けとともに起きるような早朝の活動、
- 暑さや寒さを全身でうけとめて暮らすこと、
- 森や山から食べ物を自分で手に入れること、

などは子どもたちが元気に育つやり方です。それは自然とたくさん関わった活動から作られます。守られすぎたり、便利すぎたりする生活では自然の中で生き抜く力を身につけることはできません。



アフリカカメルーン熱帯雨林に住む狩猟採集民ピグミー

私は学生たちが「自然を全身で感じてほしい、仲間を大切にしてほしい、すてきな自分に気づいてほしい」と強く願って、授業を通して体験の場を提供しています。自然の中で元気に暮らすピグミーが私たちに発信しているメッセージを学生たちに伝え、いっしょに考えていくことが私の使命でもあります。そしてアウトドアの生活体験の中にそのエッセンスがあると思っています。かつては子どもの頃の遊びを通して学んだ場所は山であり川であり森でした。今、アウトドアで火をおこせない、薪をうまく割れない、虫にさわれない、暗闇を歩けないなど大学生の体験不足は深刻です。

それは、学生の能力が低いのではなく、やったことがないだけです。自然環境の豊かな中での仲間とのたくさんの体験は、大学生活を活気のあるものに変える力があると思っています。元気な学生がたくさん育つためにも、自然をフィールドにした直接体験をさらに推進していきたいと思っています。